

日本漢文の「和臭」について

魚 返 善 雄

アメリカの元外交官で終戦後日本文学の研究に転じ、近來とみに売出した人がある。かれは永井荷風に傾倒し、川端康成の訳に苦しむし、谷崎潤一郎を世界に紹介して倦むところがない。一方では志賀直哉を随筆家と断定し、作家論でも一かどの見識を示している。それくらいであるから、日本語も流暢に話し、文法の誤りがないばかりか、普通の日本人の知らないような語彙も豊富に蓄えている。それもそのはず、東大国文科での卒論はたしか「蜻蛉日記」の研究であった。わたくしのクラスでは禅の語録の演習に参加して鋭いところを見せだし、短歌雑誌の対談会ではこちらが虚を突かれるほど食いきがってきた。

そのかれが最近日本の作家論を単行本にまとめて好評のようなので、わたくしはこうたずねてみたものである——「作家の文章を批評するくらいだから、日本文を書くときはよほど気を配るでしょうな？」するとかれは意外なことに、いまだかつて自作の日本文を活字にしたことがなく、みんな日本の英文学者に翻訳してもらっていると答えた。それを聞いてわたくしが舌を巻いたのは、あきれたからではない。まだ若いのに、かれが文章というものの恐ろしさをよく知っているからである。あのくらいに日本語ができ、日本事情に

通じ、おまけに国文科を出ているとあれば、日本文を書かないのが不思議なくらいである。日本の外国文学者などには、会話もうろくできないのに平気で外国文を書きたがるのがいくらも居る。

それはさておき、わたくしがここで頼まれているのは「日本書紀」か「古事記」の問題点というのであった。たしかに、そこにはいろいろな問題がある。表記法や音韻の問題、用語の問題、文化背景の問題、文体の問題、等等、どの一つとして大きな研究題目でないものはない。東洋大学の「日本漢文学」の時間にこれらの文献を取上げるとき、学生諸君が漢文そのものの視野や基礎において拡充せらるべきものを多く残していることを知り、わたくしはせめて三年ぐらい一つの問題点に固定して掘りさげてみたらという誘惑を感じる。

ここでは文体の問題について、たまたま先のアメリカ人の態度に感じ入ったついでに一考してみたい。中国文学の研究家、とりわけ現地に多年居住した人たちのなかには、漢文の「和臭」を軽蔑する向きがあって、たとえば頼山陽の「日本外史」は拙劣などという。日本人が日本の事を日本に居て記述し評論するのであるから、風土的色彩や臭気をとまなうのは免れがたいところであろうが、「日本外史」の文章は中国の説書人が見ても読むにたえないというほどの

ものではない。江戸時代の日本人は、あたかも西洋近世の知識人と同様、古典語に習熟することをもって教養の重要な部分と心得ていたので、その学習には骨を惜しまず努力し、言語系統の相違という根本的障害にもかかわらず、時として本国人の水準を抜くような人も現れている。

漢文はもともと符号語であり、時間と空間を超越できる点ではラテン語以上である。バイイのいわゆる「無時的」文体が漢文であり、その立脚する言語である中国語との関係を度外視すれば、「無処的」文体ということもできよう。従って、「論語」と「千字文」を与えられた人たちは、その文法と文体に習熟することによって相当に高度の漢文を綴ることができたはずである。江戸の戯作者のともがらには、片々たる「唐詩選」一冊を手本にして「狂詩選」のたぐいを巧妙に作り出すものがあつた。もちろん、基礎的教養として他の漢籍も読んでいたには違いないが、それを応用する余地は極めて限られていたのである。

明治になつても、副島蒼海の詩、菊池三溪の文などは、「和臭」の評語のもとに葬り去るにはあまりに巧妙であり、中国的心情のあやをよくとらえている。「古事記」や「日本書紀」を作製した時代の日本人も同様で、かれらの読書範囲や教養体験がけつして現代人の見くびるほど狭小でなかったことは、「懷風藻」の詩人たちの辞句を見てもわかる。のちの「和漢朗詠集」の場合も同様である。

「日本書紀」の編集は、印刷術以前の時代にもかかわらず、現代の事業として見ても大がかりなものであり、引用の文献も漢土から朝鮮、本邦にわたって多種多様である。いわば日本学界の総力を挙げて、国際文化交流の展示会場に出した労作であるから、箸にも棒

にもかからぬ代物であるはずはない。学力の水準はともかくとして帰化人も多数居たことであるし、自分免許の朝鮮人学者も進んで参加したことであろう。もともと難然とした資料にあの程度の統一を与えたことだけでも多としなくてはならないし、船頭多きにかかわらずともかく目的地に着いている点は祝福されてよい。当時としても荒唐無稽に思われたであろう「神代」の巻の伝説を、にもかくにも漢文らしいものにまとめ上げたのはご苦労さまであった。「蹈二壑庭二而陥二股、若沫雪二以颯散」(天照大神が素戔鳴尊をなじるくだり)など、中国的発想に慣れた頭で考えたと、お世辞にもうまいとはいえないし、まったく舌たらずの悪文であるが、日本人の編集員が得意そうに訳してさし出すのを塗りつぶして書きなおすことは、ライターの帰化人や朝鮮人にとつても心なきわざに思われたのであろう。

それにしても八世紀のはじめといえは、英文学では牛飼いのキッドモンの説教歌がいくらか流行し、散文の祖ビードがまだラテン語で教会史を綴っていた時代ではなかったか。われわれは古代日本人の書いた漢文の和臭を責める前に、かれらの文化史的意識の高さに敬意を払うべきであろう。